

熱帯 バイオマス社会

調査報告

Inter-riverine Society論の構築に向けて—
スアイ〜ジュラロン間エクスペディション

祖田 亮次…………… 1

K社と周辺の小農のアブラヤシ生産活動についての調査報告

定道 有頂…………… 7

関連活動記録

プロジェクト推進ミーティング報告…………… 9

UNIMAS主催：小農アブラヤシ栽培に関するセミナー報告… 9

プロジェクト・ホームページ紹介…………… 13

プロジェクト参加メンバー紹介…………… 14

編集後記…………… 14

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (S)

**東南アジア熱帯域における
プランテーション型バイオマス社会の
総合的研究**

クムナ川中流バンダンの街に立つ昔の有力者の墓 (Kelirieng Burial Poles)。
伝承によればバナナ・バーのブラサップという人物の骨が収められているという。
2010年8月 (写真：佐久間 香子)



メンバー調査報告

Inter-riverine society 論の構築に向けて— スアイ～ジュラロン間エクスペディション

祖田 亮次（大阪市立大学 文学研究科）

参加者

Jayl Langub (UNIMAS)
Linggok Ovat (ルマ・ジュライヒ)
Julaihi Ketl (ルマ・ジュライヒ)
Logie Seman (元サラワク森林局)
石川 登 (京都大学)
奥野 克巳 (桜美林大学)
甲山 治 (京都大学)
柳原 秀年 (映像作家)
祖田 亮次 (大阪市立大学)

他、現地ポーター 3 名

2012 年 8 月に、スアイ川上流からジュラロン川上流にむけて、森の中を徒歩で抜けるというエクスペディションを行いました。本科研では「流域社会」という概念が重要なキーワードのひとつとして掲げられていますが、実は、流域と流域を結ぶ分水嶺を越えての徒歩移動が、より広域的な社会的ネットワークの形成にとって重要な要素となっていたであろうという想定のもと、ジュラロン川のプロナンたちが使っ

ていた徒歩ルートを再現し、かつての流域間の結びつき（inter-riverine connection）を実感すると同時に、新たな地域社会論のユニットを考察する契機と位置づけたイベントでした。

参加者は、8 月 20 日にピントウル・オフィスに集合し、綿密なミーティングを行った上で、8 月 21 日にミリーピントウル道路沿いにあるジャンバタン・スアイのプロナン集落（ルマ・オゴス）に向かいました。ルマ・オゴスは、同村出身の有力者ダトゥ・アサン・スイの後ろ盾もあって、現在はアブラヤシ栽培で経済的に潤っており、世帯によっては 5～6 台のピックアップ・トラックや乗用車を所有しています。村内の幅の狭い未舗装道路は、常に車が行き交う状況で、いわゆる「森の民」プロナンのイメージとかけ離れた村の現状は目を見張るものがありました。

ルマ・オゴスでは、「ダイアログ・セッション」と称して、村長のオゴス氏（1931 年生まれ）をはじめとする古老たちに、スアイの集落の歴史やプロナンの移動履歴について聞き取りを行いました。断食明けの休暇で、たまたま親族宅を訪れていたタタオ県の行政長官ニユラック氏（UNIMAS 卒のジュラロン出身プロナン）も一部参加してくれました。

現在のルマ・オゴスのプロナンは、ジュラロン川のプロナン

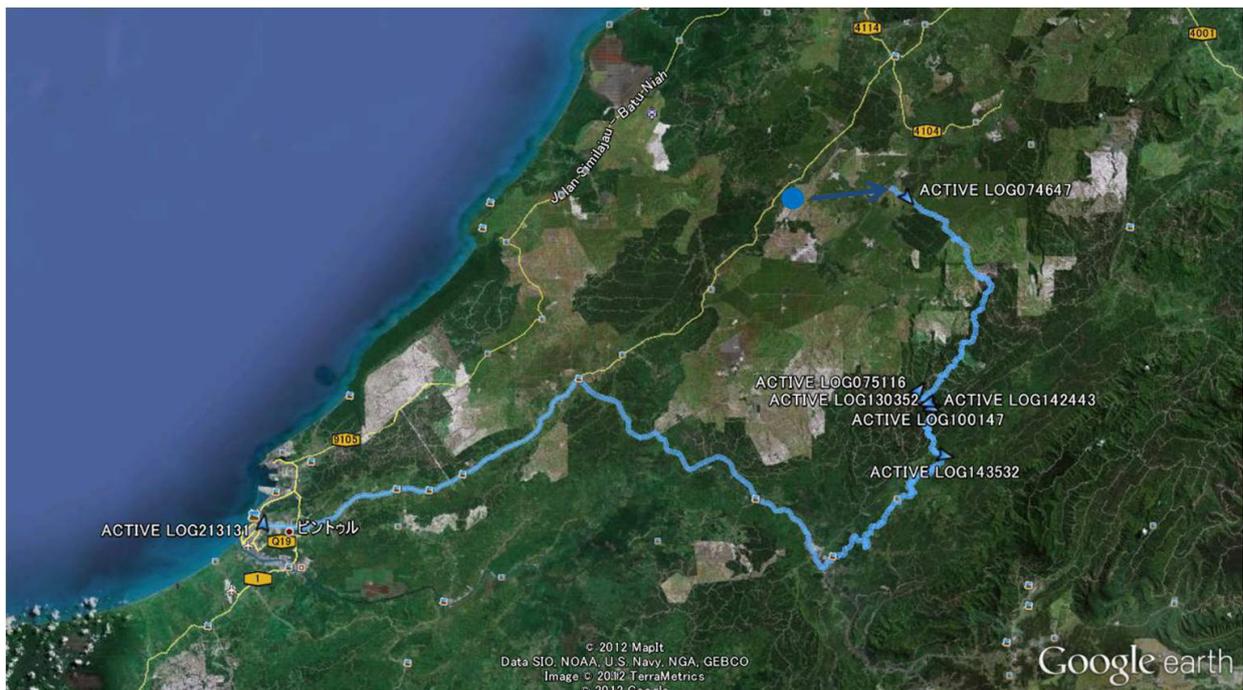


写真 1: 8 月 22 日から 24 日の行程（作成：甲山氏）

とほぼ同じ言葉話し、非常に多様かつ複雑な通婚関係・親族関係を持っており、彼らはもともと同じグループであったことが、ほぼ確認できました。オゴス氏は、歴代村長、約10代前までの歴史を記憶・記録しており、18～19世紀頃はスアイ川の再上流域に住んでいたのが、徐々にスアイ川を下りながら移動を繰り返し、1970年代に現在の場所に定着したと語ってくれました。

スアイ川下流に移動してからも、ピントゥルへつながる道路がなかった頃は、スアイ川を遡上して、そこから山を越えてジュラロン川に抜け、さらに船でトゥバオに下るとというのが、町への最も近いアクセス・ルートだったということです。また、トゥバオの町ができる以前は、ジュラロン川と支流のクブル川との合流点（現在、小学校のある場所）にブルックの築いた砦があり、先人たちはその交易所にジュルトンやダマールなどの商品を売りに行っていたとのことでした。

オゴス氏自身が今回の山越えルートを歩いたのは、1970年代が最後とのこと。その時は、今回のメインの案内役であるリンゴツ氏（ジュラロン川のルマ・ジュライヒに婚入したカヤン）と一緒にだったと言います。しかし、その後オゴス氏は、山越えの徒歩ルートを使うことはなくなったそうです。1970年代半ばにミリーピントゥル道路が開通したことにより、最も近い町が陸路で行けるピントゥルになったことが大きな要因だったようです。

ルマ・オゴスで一泊した後、翌22日の朝に、4WD車でスアイ川上流に向かいました。スアイ川沿いは、ほぼアブラヤシ・プランテーションで覆われているため、かつてのよ

うな船での遡上ではなく、陸路を利用して徒歩ルートの出発点まで移動しました。

まず、かつて船で移動していた時代にあったという、スアイ川最上流地点の船着き場（1990年代初頭までは小屋の支柱に使っていた鉄木が残っていたとのこと）の場所を確認した上で尾根線まで戻り、そこから歩き始めました。午前11時半くらいでした。10年ほど前までは、ジュラロンのプナンたちが狩猟や漁撈目的でも使っていたルートでもありましたが、やはりかなりの年月使用していなかったため、藪こぎ（主にリンゴツ氏が担当）に時間がかかり、歩行の速度は遅々としたものでした。しかしその分、頻繁に小休止を取りながら、ゆっくりと楽に歩くことができました。

22日は、午後2時半ごろに歩行を終えて、ジュラロン川支流のムルアン川のさらに支流であるブルスカット川沿いで野営準備を始めました。野営の仕方はグループ内でも色々な意見がありましたが、プナン・スタイル（即席小屋での雑魚寝）と森林局スタイル（ハンモック利用）に分かれて、各自が選ぶことにしました。夜中に小雨がぱらつきましたが、恐れていた蚊に悩まされることはありませんでした。リンゴツ氏に言わせると、しばらく人が入っていなかったのが蚊がいないのは当然で、あと3～4日も野営していれば、大量の蚊が発生してくるだろうとのことでした。

23日の朝食は、川に仕掛けていた網に魚がかかっていたので、それをスープにした豪華なものでした。ゆっくりとした食事を楽しんだ後、午前9時ごろに出発しましたが、前日同様、藪こぎに時間がかかりました。ジュラロンの側のかつての船着き場であったムルアン川とスサン川の合流点にたどり着いたのは、ちょうど正午頃でした。今回は、藪こぎが大変だったこと、荷物が多かったこと、途中で森に関するいろいろな知識を聞きながら歩いたことなどから、1泊2日かけて歩いたこととなりますが、かつて徒歩ルートが歩きやすく維持されていた頃は、スアイ川の船着き場からムルアン川の船着き場まで、彼らの足で3時間もあれば移動できる距離だったということです。ジュラロンやスアイのプナンたちが容易に山を越えて、異なる水系を常に行き来していたことを想像できた瞬間でした。

しかしながら、今回は乾季の8月にエクスペディションを強行したことから、ムルアン川の水量は船が入れるほど十分なものではありませんでした。出発前のリンゴツ氏は、事前にスサン川に船を準備しておくと言っていたのですが、水量が足りずにそれができず、結局、我々は、目的地のルマ・ジュライヒまでさらに歩かざるを得ませんでした。



写真 2: 山越えGPS 4 画像で見るルート（作成：甲山氏）

船を使えば、短時間で楽に到着できるのに…という思いを胸に抱きながら（それぞれ口にしながら）森の中を歩き、午後5時前に伐採道路に出ました。そこからは、小雨のぱらつくなか伐採道路沿いを歩き、ルマ・ジュライヒ（火事で燃えたあとに作られた新村の方）に到着したのは、午後6時過ぎでした。そこで、十分に水分補給したのち、消失した古いロングハウスの方に移動して、リンゴッ氏の仮宅（焼け残った倉庫を改造した家）で一泊しました。

最後のスサン川からルマ・ジュライヒまでの徒歩移動では予想以上に時間がかかり、今回のエクスペディションで唯一疲れを感じた行程でしたが、それでも、森の中の徒歩ルートがきちんと維持されていて、支流河川の水量も航行可能なくらいに十分にあったとしたら、山越えによる流域間移動はかなり容易なものであったであろうと実感できました。その意味では、かつて存在していた、異なる流域を結ぶ形での社会的ネットワークを再評価する契機として、大変貴重な体験であったと思います。

24日は、ロングボートで移動し、ルマ・レサとルマ・ウダオに立ち寄ったあと、午後1時過ぎにトゥバオの町に到着しました。トゥバオからピントウルまでは車をチャーターし、その移動途中でラハップ氏宅によって、甲山氏の設置している流量計のデータを吸い上げて帰りました。

25日の午前は、ピントウル・オフィスにて、エクスペディションにも同行してくれたジュラロン・プナンのジュライヒ村長へ

のインタビュー・セッションを設け、ジュラロン・プナンの歴史や婚姻関係などについて、詳細な聞き取りを行いました。その結果、ジュライヒ氏自身もクジャマンの末裔であることや、それ以外の世帯においても、スアイのプナンはもろんのこと、イバンやカヤン、バイ・スガン、華人、サンバス・マレー、プキタン、クニヤなど、実に多様な民族との婚姻を繰り返してきたことが分かり、この地域のプナンの「プナン性」について、改めて考えさせられました。

山越えに参加したジャイル氏は25日の午後にクチンに戻りましたが、入れ替わりにラシッド氏（UNIMAS）がピントウル入りし、石川氏、奥野氏、祖田とともに、バトゥ・スブルのムスリム・プナンの村に調査に向かいました。26日と27日も、この4人でラバンやピントウルのプナンやバイ・スガンの調査を行いました。そのなかで、ジュライヒ氏が語っていた、「プナンとバイ・スガンが一緒になってムラナウになる」という言説もあちこちで聞かれ、エスニシティと宗教の複雑さに圧倒されました。また、移動の履歴を聞くなかで、今回のエクスペディション・ルートだけでなく、ジュラロンとスアイを結ぶルートが複数存在していたことや、ブラガあるいはティンジャールへの山越えルートも多様であったことが分かりました。

今回のエクスペディションおよび聞き取り調査では、ラシッド氏はバイ・スガンやプナンのイスラム化過程に、ジャイル氏はジュラロン周辺のプナンやカヤンの歴史などに強い興

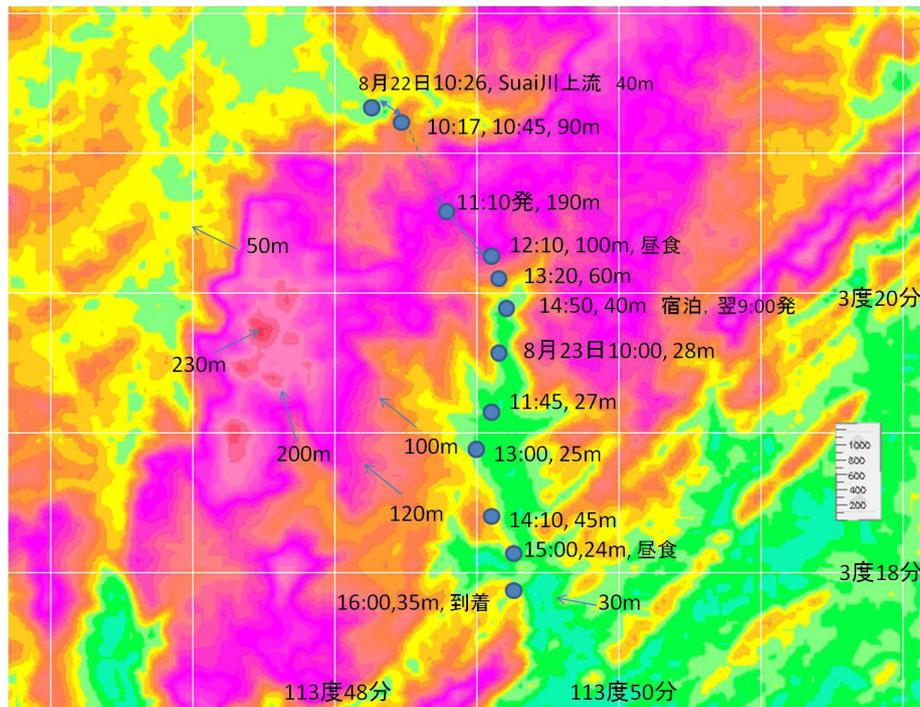


写真4 山越えスアイ・ジュラロン（作成：甲山氏）

味関心を示し、今後も継続的な共同調査を行っていくべきことを互いに確認し合えたことは、大きな成果でした。いずれ、多方面からの調査報告がシンクロナイズして、流域社会および流域「間」社会の議論が成熟していくことを期待します。

なお、柳原氏は26日に帰国しました。エクスペディション道中での撮影は他のメンバー以上に体力を消耗する作業で大変だったと思います。また、ミーティングやインタビューなどの撮影にもご協力いただきました。感謝いたします。他のメンバーの動向としては、ロギー氏が26日からの徳地氏・福島氏らの水質調査に同行してアナップやピニョへと向かい、祖田は27日午後からシブ周辺での河川調査に向かいました。甲山氏はビントウル・オフィスで今回のルートの地図作成などを行った上で、29日にサラワクを離れインドネシア入りしました。石川氏・奥野氏は28日以降、プナン追跡調査の足を、ミリのラポックや、ロング・ラマ、ロング・ブディアン、さらには、その先のセミ・ノマデックなプナンの村まで伸ばしました。9月1日には奥野氏が帰国しましたが、入れ替わりにジャイル氏が再びビントウル入りして、ジャンバタン・スアイおよびビントウル周辺で数日間、石川氏とプナンならびにカヤンについての聞き取り等の調査を行うとともに、クチンのサラワク博物館図書室で『サラワク官報』の資料収集を行いました。

以下に、今回のエクスペディション参加者の感想・コメントを掲載します。



写真 5: 野営場所の設置準備

エクスペディションに参加して (ジャイル・ランゴブ)

今回のエクスペディションの目的は、ミリのスアイ・プナンとビントウルのジュラロン・プナンとの間の取引関係や社会関係をたどることにありました。今回の移動のルートは、ブルック時代以前に、ブルネイ商人たちによって使われていた2つのルートのうちの1つです。スアイやジュラロンのプナンたちは、近隣で木材伐採やアブラヤシ・プランテーション開発がおこなわれるようになるなか、このルートを1990年代まで使っていました。スアイ側の領域は今やほぼアブラヤシ・プランテーションに転換されており、その部分はランドクルーザを利用しなければなりません。ジュラロン側では、ムルアン川沿いを通して歩くことになりましたが、そこも一部は商業伐採が入っており、元々のルートが失われているところもありました。私たちは、1泊2日の山越えのあと、ジュラロン川沿いの全てのプナン集落を訪れることもできました。

スアイージュラロン間エクスペディションに参加して (奥野 克巳)

このエクスペディションから遡ることちょうど1年前の2011年8月、石川氏と祖田氏と一緒に訪ねたジュラロン川のルマ・ジュライヒで、あるプナンの老人から、かつては、ジュラロンとスアイのプナンは、森のなかを歩いてよく行き来していたのだという話を聞きました。そのときの話が、今回のエクスペディションの企画のきっかけだったように思います。

歩き始めて二日目の朝、甲山氏のGPS測定で、スアイ側の森の入り口からジュラロン側の船着き場までは直線距離としては8キロだという情報を得た私は、行程はたいしたこ



写真 6: 野営地での夕食



写真 7: 野営のための即席小屋

とないと直感したのですが、存外に、藪こきをしながら進む森の道のりはハードで疲労が溜まり、くたびれ果ててしまいました。いまから思い返せば、私のなかに、精神面での気の緩みがあったように思います。他方で、プナンは、いまでもそうであるように、森のなかではつねにスティックです。勾配のある森を軽々と歩きます。それが、「森の民」の精神性であるのかどうかは分かりませんが、かつて、彼らが使っていた森の道を実際に辿ってみるという今回のエクスペディションは、人とランドスケープの関わりについてだけでなく、人と人の結びつきから生まれる社会の成り立ちを考えてみるときに、私たちに靈感を与えてくれるような気がしています。

スアイージュラロン間エクスペディションに参加して (甲山 治)

3か月ほど前に祖田氏からこのエクスペディションにお誘いいただき、地形・地図読みおよびGPS担当として参加しました。日本やヒマラヤでの登山経験はあったものの、サラワク周辺の山はサバ州のキナバル山の登山道だけであり、出発前は地形図から読み取れる情報以上に用心することを心がけていました。インドネシアでは不快で歩きにくい泥炭湿地林を主な研究対象としており、それと比較すると非常に快適でした。地元の若い人であれば私たちと同じルートを3時間程度で超えていたそうで、かつて2つの流域の生活圏が重なっていたということが実感出来ました。

なおGPSの情報から、分水嶺を越えてジュラロン川支流のムルアン川のさらに支流であるブルスカット川の谷筋までは直線的なルートで進み、雨季には船着き場として利用しているムルアン川とスサン川の合流点までも快適な



写真 8: 野営小屋を開いた後(2日目の出発)

ペースで進みましたが、それ以降は川筋から少し高い斜面を進んだため少し遠まわりをするルートを取ったことが分かります。おそらく船着き場以降の道はいくつかあるルートの一つであり、他の道も存在すると思われました。

エクスペディションに参加して感じたこと (柳原 秀年)

映像に携わる者が、人類学研究者と共にジャングルへ入る。撮影者として気になるのは、何が撮れるのか、そもそも撮影は続行できる状況なのか。

今回、参加したのは、スアイ川上流からジュラロン川上流を足で目指すエクスペディション。アフリカなどのジャングルの経験はあったものの、徒歩で入るのは全くの初めてでした。また、ジャングルの中で夜を過ごすのも。

私は、カメラを片手に同行しました。常に片手は塞がれた状態。4人の日本人の方や地元の案内役などがいますが、現地の言葉が全く分からない自分にとって、孤独感もありました。

ジャングルで見えるものは全てが不思議なものばかりでした。棘だらけの木。時々、毛のようなものが引っかかっているのを見ましたが、イノシシか何か獣の毛でしょうか。にしても、5cmも10cmもあるような棘で、「この木は何がしたいのか?」疲れが増すごとに腹立たしく思います。耳鳴りのような虫の声。額から汗が流れ目を痛めるごとに、その虫の声にイライラが増します。

先頭に立ったのは、リングさん。かつてこのジャングルを数回、横断した経験者です。 paran という刀をブンブンと振り回し、枝を切り、私たちのために通り道を作って進みます。その迷いのない行進には圧倒されっぱなし。太陽もろ

くに見えないジャングルで、その方向感覚をどうやって維持しているのでしょうか。

昼過ぎ、早めに行進を切り上げ、今夜の宿を築きます。パランで、1時間足らずで床つきの簡易小屋を構築。ナイフを使って枝に細工をし、あっという間に火を焚きます。

その場で収穫した魚のスープを調理。基本は現地調達。子供一人分程度の重量になった荷物を背負った自分が情けなく感じました。

夜は快適そのもの、涼しく虫に悩まされることもありません。疲労でしょうか。自分のいびきで周りの人には迷惑をかけたそうですが。

朝、甘い珈琲をいただき、再出発。

ふいに襲って来たためまい。単なる疲れなのか、それとも熱中症？正直、私は、絶対に誰よりも元気に、この撮影を終える気でしたが、弱音を吐いてしまいました。

足手まといになるものかと思ったものの、「かつて地元の人たちがジャングルを抜けた際には、囚らずも病気になった人などもいたかもしれない」と考え、自分で慰めた次第です。僕が病気になれば、それはそれでリアルなジャングル横断劇になったことと思います。これは負け惜しみです。

水を流す枝を渡されました。喉を潤されます。これほど美味しい水を飲んだことはないと思うほどに、貴重な体験です。

予定していた船着き場は、乾期のためボートも入ることができないため、そのまま徒歩で川沿いを下ります。

かつての横断では、どこまでが想定内で、どんな想定外なハプニングがあったのでしょうか。いずれにしても、どんなトラブルでもきつと乗り越えられるエネルギーがあったことと推測できます。

私の個人的な感想ですが、流域の生活圏の結びつきを体験することが、何かを解明したというよりも、更なる興味や疑問が湧いてでてきた印象です。

個人的な関心が、より深まり、広がる体験でした。この撮影したフッテージをまとめて、近いうちにご覧いただければと思います。ありがとうございました。

結ばれる水系：中央ボルネオ社会の理解にむけて
(石川 登)

二つの（もしくはそれ以上の）水系によって遠く離れた多くの人々が結ばれる。これは親族関係であったり、森林産物の交易であったり、記憶の共有であったり、その形はさまざまである。病気でたくさんの人々が急に亡くなった時の緊

急脱出路となったこともあるようだ。水系が結節する空間は多くの場合は分水嶺となっていて、人々は一つの水系から他の水系のあいだを歩いて繋ぐ。

今回実施したジャングル・トレッキングは、その計画の思いつきの度合いやリジットな調査結果よりも何か面白いことを期待するといった意味から、企画立案当初から私たちは「フィールドワーク」より「エクスペディション」という言葉で呼んでいた。頭よりも体を使って感じられるものを大切にしたい、というシンプルな思いから生まれたプロジェクトだった。

異なる水系を数時間の徒歩でつなぐこと、これを感じることができたのが第一の収穫である。伝聞よりも書物の引用よりも足でかせいだ確かな情報、実感である。第二の収穫は、この調査から考えられるいくつかの議論が、おそらくネットワーク論にとどまらない、中央ボルネオ、さらには島嶼部東南アジアの社会編成に関する大きな議論に拡がる可能性をもつことを確認したことである。

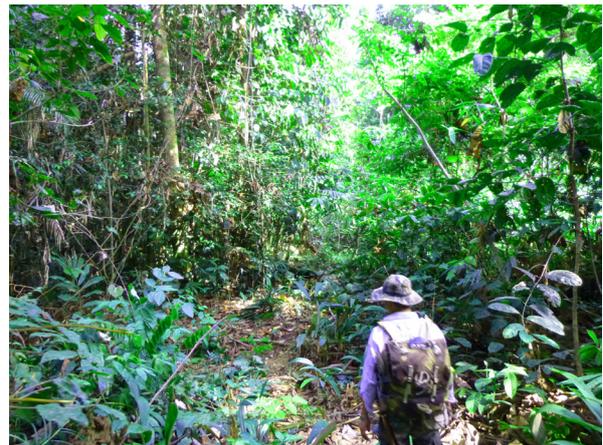


写真 9: スサン川付近の歩行ルート

(写真 5-9: 祖田 亮次)

K社と周辺の小農のアブラヤシ生産活動についての調査報告

2012年9月14日～21日

定道 有頂（産業技術総合研究所）

2011年8月に開始した生方・定道のK社での共同調査はこれで3回目となる。K社は、サラワク州ピントウル省にあるアブラヤシ・プランテーションと搾油工場を持つ会社であり、RSPO認証を取得しているため、認証で要求される環境・社会側面の規定に従って活動していることを示すための証拠書類がいつでも開示できるように準備されている。第1回・第2回の調査においては、この資料を中心に調査を行い、例えば、アブラヤシ生産量、肥料・農薬使用量、トラックや発電機の燃料消費量といったK社内の資金・物質フローが把握できるデータを収集してきた。今回の調査は、アブラヤシ生産活動を資金・物質フロー分析を完成させるため、不足していたデータを揃える情報収集が目的である。情報収集は、K社だけではなく、特に情報の不足していた小農を中心に行った。調査の概要を定道が担当する「温室効果ガス排出量の分析」という視点から報告する。

9月14日 MPOB 訪問

クチンにあるMPOB（Malaysian Palm Oil Board）のサラワク事務所を訪問し、所長にインタビューを行った。MPOBは、マレーシアのアブラヤシ産業の管理・促進・研究開発を行う政府の一機関であり、アブラヤシに関する多くの活動を行うにはMPOBが管理するライセンスを取得する必要がある。インタビューでわかったことは、ライセンスを通して、国内のアブラヤシに関するサプライチェーンに関する情報を広範囲に把握できるようになっていることだ。例えば、種、苗、果実に関しては物量・場所・販売先などの情報を追跡することができるようになっている。我々はこうしたデータを直接利用することはできないが、MPOBの論文誌Journal of Oil Palm Researchを見ると、MPOB内部では、このデータを利用して研究が行われているようだ。

9月17-18日 小農の調査（その1）

K社付近のロングハウスを中心に2日間で計6件のアブラヤシ小農を訪問し、アブラヤシ栽培に関して情報を

集めた。アブラヤシ栽培に伴う温室効果ガス排出量は、炭素貯蓄量のできる限り少ない土地（例えば、植生の少ない荒地）をアブラヤシ農園に転換し、窒素肥料の投入を可能な限り低く抑えた上で、いかに多くの収量を得るか、ということにより最小限にできることがこれまでの調査により判明している。インタビューにおいては、この3項目を中心に質問し、他に温室効果ガスの排出源に見落としが無いように、開墾・草刈・除草剤散布に使用したガソリン使用量（燃料の消費は温室効果ガス排出に繋がる）などの項目についても情報を集めた。



写真1 除草剤散布機の使い方を実演してくれたアブラヤシ小農の女性

調査で判明したのは、小農においては、限られた資金・時間・知識の中で栽培が行われるため、徹底した管理の下で栽培されるプランテーションに比べて投入される窒素施肥量に比べて、収量が低いことである。写真にあるように、調査した小農のアブラヤシの葉や雑草の状態を見ると、プランテーションのアブラヤシとの違いは一目瞭然であり、こうした要因により、収量が低くなるのではないかと推測できる。

9月19日 小農の調査（その2）

K社がRSPO認証対応の1つとして、アブラヤシに関して直接何らかの支援を行っているロングハウス2軒を訪問し、アブラヤシ栽培に関する情報を集めた。これらのロングハウスでは、K社が開催するトレーニング・コースにより、十分な栽培管理が行われており、かつ、アブラヤシ栽培のみにより生計を立てている人もいるため、より徹底した栽培管理が行われているという印象を受けた。アブラヤシの状態を見ても素人目にはプランテーションとの違いはわからなかった。

9月20日 K社訪問

この日はK社を訪問し、情報収集を行った。これまでに行った調査において栽培に関する大半のデータを収集済みだが、土地を開墾し、アブラヤシ農園にするまでの情報が欠けていた。これに関する情報を得ようとするが、K社のRSPO取得以前の情報となるため、詳細な情報を得ることはできなかった。K社の搾油工場も訪問し、副工場長にインタビューして、工場排水からメタンを回収する技術導入の障害や認証パーム油の問題点について話を伺った。

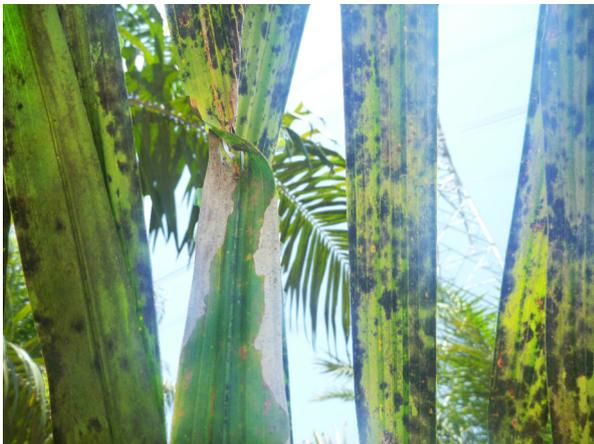


写真2・3 ある小農が栽培するアブラヤシの葉葉が黄色くなり、黒い斑点が所々に見える。



写真4 雑草が繁茂したアブラヤシ畑。アブラヤシが十分な大きさに育つまでは、定期的な除草はアブラヤシの生育にとって大変重要である。



写真5 アブラヤシ農園にてアブラヤシ収穫時に使用される鎌の使い方について説明してくれるアブラヤシ小農の男性。

まとめ

今回の調査により、アブラヤシ栽培に関してプランテーションと小農の両方に関する情報が揃い、現状のアブラヤシ栽培における資金・物質フローに関する基礎データがほぼ揃ったことになる。特に小農とプランテーションによる栽培の違いや、その要因について推測ではあるものの、一部把握できたことは大きな成果であった。物理的・時間的に入手不可能なデータに関しては、現在、文献や様々な仮定を用いて推測・補完する作業をしており、成果の執筆に向けて準備中である。

関連活動記録

プロジェクト推進ミーティング報告

2012年10月31日
(京都大学 東南アジア研究所にて開催)

これまで、各メンバーの個別調査や各グループでの共同調査は確実に進展し、研究会や全体会議、各種学会等でも報告してきましたが、それらの研究がプロジェクト全体のなかでどのように位置づけられるのか、そして、さらなる共同調査を推進していくためには何が必要なのかを議論するため、メンバー・ミーティングを開催しました。

2012年に入ってから、全体会議や中間ミーティングなどでは、外部エグゼクティブを招いてプロジェクト全体に対する講評をいただけてきました。今回は、それらの評価も強く意識しながら、構造的インタビューなど、残された約2年半でどのような調査を行うべきかや、プロジェクト全体像の提示の方法などについて議論をしました。

議論の結果、まず現時点での成果を集約し、パワーポイントとしてまとめることによって、プロジェクト全体のストーリーや、そのために何が不足しているかを明確化していくという作業を進めることが決まりました。現在まとめパワーポイントの作成を行っており、2013年初頭には完成する予定です。

(文責 祖田 亮次・鮫島 弘光)



写真：リラックスした雰囲気の中、率直な意見交換が行われた

UNIMAS主催：小農アブラヤシ栽培に関するセミナー報告

2012年12月5日
マレーシア・サラワク大学 東アジア研究所にて

2012年12月5日(火)にマレーシア・サラワク大学の東アジア研究所でアブラヤシ小農に関するセミナーが開催された。当プロジェクトからは祖田 亮次と加藤 裕美が参加した。セミナーの詳細と各発表者の発表内容は以下の通りである。

セミナータイトル：

“The Last Malaysian Oil Palm Frontier: Oil Palm Smallholders and the Emerging Socio-economic Landscape of Rural Sarawak”

日時：2012年12月5日(火) 9:00-14:00

場所：Institute of East Asian Studies, Universiti Malaysia Sarawak

1. Richard Schatz (IEAS, UNIMAS)

“The Transformation of Sarawak Agriculture: An Historical Overview, 1963-2011”

1963年、サラワク人口の80%は農民で、多様な商品作物を育てていた。マラヤや英領北ボルネオは植民地時代に大規模なプランテーションを開いてきたが、サラワクはブルック政府がそれを拒み、小農が育成されてきた。しかし、現在、人口の28%のみが農民で、その多くがたった1つの商品作物、つまりアブラヤシを育てているような状況である。ヤシ油の価格が良ければ人々の生計もよいが、200年の資本主義経済の経験から、またすべての商品作物に共通して言えることは、価格が上がったあとには必ず下がるということである。

現在、サラワクの農業面積の70%にアブラヤシが植えられており、その価格が下がった場合サラワクはかなりの影響を受けるであろう。さらに、現在200,000人のインドネシア人がサラワクのアブラヤシプランテーションで働いており、大量の労働者を移民に依存することは、社会的、経済的、政治的に問題をはらんでいる。逆に小農栽培は良い点が多い。まず、RM3000ぐらいの月収入を得ることができ、土地問題が少ない。そして地元の労働力を使うことができ、生態への影響も少ない。

2. Soda Ryoji (Osaka City University)

Kato Yumi (Waseda University)

“Impacts of Oil Palm Smallholdings on Rural-urban Household Economy: A Case in Bintulu, Sarawak”

アブラヤシは人々にマイナスのインパクトを与えたと考えられてきたが、意外にも人々は積極的に栽培を受け入れている。特にビンツルはサラワクの他省と比較しても栽培面積が急速に拡大している地域である。小農の間でも、栽培状況は多様であるが、栽培本数が少なくともある一定の収入を得ており、他の商品作物栽培と比べても安定している。小農は、価格の上下にも慣れているので、今後のアブラヤシ価格の変動にも対応できると考えている。また、アブラヤシ以外のたくさんの生業の選択肢もある。

近年では、アブラヤシ栽培によって都市世帯と農村世帯の関係にも新たな展開がみられる。町に出て行った人が村に引き上げてきたり、週末農業をしに村に帰る頻度が高くなったりしており、村の活性化がみられる。それと同時に家族の居住場所は複雑になり、農村世帯と都市世帯を分けることが難しく、世帯は空間的に拡大しているといえる。従来と異なる点として、農村世帯が必ずしも都市世帯に依存しているとは言えず、農村は稼げる場所として経済力をつけてきていると同時に、都市住民による投資の場とも捉えられるようになってきている。農村世帯と都市世帯とを統合的に見る視点が必要になっている。

3. Abdul Rashid Abdullah (IEAS, UNIMAS)

“Oil Palm Smallholders of East Malaysia: Articulating With the Industry and Global Market”

アブラヤシ産業はサラワクの主要な産業であり、それは地域の生計を改善することが謳われて開発が進められてきた。1970年代サラワクでは半島部の FELDA の例を踏襲して、プランテーションベースのコミュニティーを作ること計画した。プランテーション周辺に小農を配置し、プランテーションと小農の関係を人工的に築こうとしたのだ。しかしながら1980年代になると多様なアクターが参入するようになった。SALCRA、LCDA、FELDA、MPOB などである。使っていないNCRをJoint Ventureとして利用することにもなっていた。アブラヤシ小農栽培にはネガティブな面も存在する。アブラヤシは他の商品作物と比べて、市場の影響を受けやすい。小農は自身でアブラヤシを加工し、ストックすることができないので、ゴムやコショウのようにタイムラグを利用した販売戦略をとることはできず、

どんなに価格が安くても売らなければならない。アブラヤシの安定的収穫には施肥がもっとも重要な要素になるが、小農は肥料を十分に与えない場合が多いので収穫量は少なくなってしまう。うまくいかない小農では、近くに工場がないのに植え始めたり、工場に売りに行くまで2-3日かかるのでその時間差を考えて未熟な実を収穫してしまったりする人々もいる。

4. Dave Lumenta (Universitas Indonesia)

“Fighting Oil Palm with Rubber: Contesting the West Kalimantan Borderland Area”

インドネシア、西カリマンタン州のカブアス川上流では、2005年以降警察や軍隊の取り締まり強化によって違法伐採が激減した。それ以降SSHという国家計画もあり、地方行政は人々にアブラヤシ小農に取り組むように勧めた。カブアス川上流では、現在24のプランテーション・コンセッションが発行されている。2006年には同地区の3.5%の土地にコンセッションが発行されたが2012年には17%にまでなっている。それにともない森林のダウングレードカテゴリーがなされるようになった。特に違法伐採以降Production ForestやLimited Production ForestなどはNon Forest Areaに変えられている。Non Forest Areaはアブラヤシが栽培できる土地だからだ。それに対し、ゴム園は森に分類され、人々によって管理されているとみなされる。このため、多くのイバンが土地確保を目的にアブラヤシではなくゴムを植えて対抗している。また、ゴム価格の高騰化にともなう人々のゴム栽培が加速している。イバンのアブラヤシに対する抵抗はアブラヤシそのものに対する抵抗というよりも、より大きく複雑な土地制度に対する抵抗と言える。

5. Dimbab Ngidang (IEAS, UNIMAS)

“Smallholder’s Response to Oil Palm Expansion in Malaysian Borneo State of Sarawak”

サラワクにおける農業の変遷には、狩猟採集→定住

稲作→商品作物栽培という大きな流れがある。1981年LCDAの設立以降企業によって開発が進められてきた。NCRはプランテーション産業にとって最も「使いやすい」土地である。1996年に「新しいコンセプト」のもとで、JVC (Joint Venture Company) 方式が導入されて以降、先祖の土地は経済成長と貧困削減という名目のもとに開発されていった。その結果、土地を巡って、政府、小農、企業が三つ巴になって争っている。アブラヤシは人々に

とって作物の多様性、生計戦略として植え始められている。アブラヤシ関連産業もさまざまある。輸送業、種苗業、ライセンス業、製油業、機械メンテナンス業などさまざまな関連産業が生まれている。小農栽培は、資本、苗、肥料へのアクセスによって格差が生まれている。MPOBからの支援は土地登記がないと受けられず、労働力や道路設備、輸送手段も必要である。小農の生産性が悪いのは、多くの場合、肥料不足、メンテナンス不足、植栽間隔の狭さが原因する。そして、アブラヤシ栽培に関する知識の不足も大きな要因として存在している。しかしながら、適切な栽培方法をとれば、経済的には高い収益を得ることができ、小農ベースでアブラヤシ栽培を進めれば、土地争いも少なくなるであろう。

セミナー全体を通して、サラワクの農業政策の変遷、アブラヤシ栽培拡大の過程が要点良くまとめられていた。小農栽培についてはそのポジティブな面とともにネガティブな面が各地の事例を豊富に示され、活発な議論がされた。アブラヤシ栽培がサラワクの農業や人々の生活に与える影響については、今後様々な視点からさらなる研究が期待される。



写真 セミナーで発表する祖田 亮次氏

(文責・写真 加藤 裕美)

本プロジェクトのホームページのご紹介

<http://biomassociety.org>



当プロジェクトのホームページを開設しております。

- ・ メンバーによる調査報告
- ・ 講演会やワークショップ等、関連活動の紹介
- ・ ニュースレターのバックナンバー（英語版もあります）
- ・ 細心の活動などについても随時お知らせしております。

是非一度、ご覧ください。

プロジェクト参加メンバー（研究代表者・研究分担者・連携研究者・協力者）

研究代表者	石川 登	人類学	京都大学 東南アジア研究所
研究分担者	祖田 亮次	地理学	大阪市立大学 文学研究科
	河野 泰之	自然資源管理	京都大学 東南アジア研究所
	杉原 薫	グローバルヒストリー	東京大学 大学院経済学研究科
	水野 広祐	農業経済学	京都大学 東南アジア研究所
	徳地 直子	森林生態保全学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	内堀 基光	文化人類学	放送大学 教養学部
連携研究者	鮫島 弘光	生態学	京都大学 東南アジア研究所
	藤田 素子	鳥類生態学	京都大学 東南アジア研究所
	甲山 治	水文学	京都大学 東南アジア研究所
	福島 慶太郎	森林生態系生態学	京都大学 フィールド科学教育研究センター
	津上 誠	文化人類学	東北学院大学 教養学部
	奥野 克巳	文化人類学	桜美林大学 リベラルアーツ学群
	市川 昌広	東南アジア地域研究	高知大学 農学部
	小泉 都	生態人類学	京都大学 農学研究科
	生方 史数	天然資源経済学	岡山大学 大学院環境生命科学研究所
	市川 哲	文化人類学	立教大学 観光学部
協力者	定道 有頂	ライフサイクル・アセスメント	産業技術総合研究所
	Nathan Badenoch	東南アジア地域研究	京都大学 東南アジア研究所
	田中 耕司	東南アジア地域研究	京都大学 研究国際部学術研究支援室
	佐久間 香子	文化人類学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	小林 篤史	歴史学	京都大学 アジア・アフリカ地域研究研究科
	Wil de Jong	森林社会学	京都大学 地域研究統合情報センター
	内藤 大輔	地域研究	総合地球環境学研究所
	Jason Hon	動物生態学	京都大学 地球環境学堂
	加藤 裕美	文化人類学	早稲田大学 アジア太平洋研究センター
	Khairuddin Ab Hamid	情報学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lau Seng	水文学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	AbdulRashid Abdullah	社会人類学	University of Malaysia Sarawak (UNIMAS)
	Lee Hua Seng	森林社会学	元 Sarawak Timber Association
	太田 淳	歴史学	広島大学 文学研究科
	大竹 真二	映像人類学	モイ
	木谷 公哉	情報学	京都大学 東南アジア研究所
事務局	田中 園子	総務・会計担当	京都大学 東南アジア研究所
	中根 英紀	情報管理・発信担当	京都大学 東南アジア研究所

編集後記：

本ニュースレターはプロジェクトメンバー以外の方にも配信いたしております。

配信を希望される方は事務局：
(nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp) までご連絡ください。

またイベントのお知らせ、過去のニュースレターなどは当プロジェクトのホームページ：

(<http://biomassociety.org/>) で見るができますので、そちらの方もご参照ください。

(鮫島弘光)

京都大学 東南アジア研究所
606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL/FAX: 075-753-7338
<http://biomassociety.org>
E-mail: nakane@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 鮫島 弘光 中根 英紀 (基盤S事務局)

クムナ川中流バンダンの街
2010年8月 (写真: 佐久間 香子)

